〔論 文〕

マレーシア国立クランタン大学からの短期留学プログラムの受け入れ：サービスラーニングを通じたイスラム文化間との双方向の学び・地域アーカイブズ構築

安　倍　尚　紀
Abe DN Naoki

大分県立芸術文化短期大学
研究紀要　第54巻
2017年3月

〔論　文〕

マレーシア国立クランタン大学からの短期留学プログラムの受け入れ:サービスラーニングを通じたイスラム文化間との双方向の学び・地域アーカイブズ構築

安　倍　尚　紀[1]
Abe DN Naoki

概要　「おんせん県おおいた」商標登録（2013年）以後は言うまでもないが、日本国内、特に観光分野における大分県の存在感が高いことは、さまざまな調査から伺い知ることができる。ところが他方、インバウンド向け情報発信（日本人による発信／外国人による発信）という意味では、心もとない状態にあると言わざるを得ない。たとえば紙媒体である。日本人が海外旅行時に用いる『地球の歩き方』や『るるぶ』『まっぷる』に該当する英文の観光ガイド『ロンリープラネット(lonely planet)』の掲載ページ数でいえば、全９００ページ弱のうち、大分県についての記載は１０ページしかなく、県庁所在地である大分市についてはまったく記述がない。同様にインターネット媒体のTripadvisorでは、2016年末の時点で約800登録されているランドマークのほとんどは、主要なもの以外、日本語でしか閲覧することができない。大分県への潜在的な訪問客が受け取れる（インバウンド向け）情報が存在していないということは、厳しい表現をすれば、物理的に存在していないのと同じである。このような中、2012年度から継続しているマレーシア国立クランタン大学を中心とした東南アジアの諸大学との交流の中で、筆者はこれまでＳＮＳを活用した英語／日本語での情報発信に取り組んできており、確かな手ごたえを受けとっている。加えて、2016年度、芸短フェスタ「拡張現実による地域アーカイブズ構築」としてサービスラーニングの枠組みで本学への短期留学生３名を受け入れ、３Ｄ映像によるアーカイブズ構築と情報発信に取り組んできた。本稿では、その射程と全体像を明らかにしていきたい。

キーワード　内なるグローバル化、地域アーカイブズ、留学生受け入れ、インバウンド向け情報発信

[1] 大分県立芸術文化短期大学・専任講師　Tenured Senior Lecturer, Departments of Information and Communication, Oita Public Junior College of Art and Culture

Aceptance of the Study Visit Program in Japan: Mutual Learning between Muslim and Japanese Culture through Service Learning Building Regional Archives.

Naoki DN ABE, Ph.D

Abstruct Not to mention about after the trademark registration “Onsen ken-OITA” (2013), the name Oita prefecture has been keeping high presence all over the Japan, especially as for field of tourism. Plenty of survey until now certifies this as fact. But on the other hands, this presence of Oita prefecture is in very much poor situation when it comes to offering information for overseas visitor. For example let’s take a look at the paper media “Lonely Planet Japan” (2015) which traveler using English often refer [like a “Chikyu no Aruki Kata” or “Mapple” referred by Japanese traveler]. Only 10 pages are allocated for description of Oita prefecture in about 900 total pages. Moreover no description is seen about Oita city. At the same time in poplar internet media Tripadvisor we can only find little description written in English except Japanese language from 800 registered landmarks. Speaking severely, these all facts [there are no information acceptable for expected visitors] means there Oita prefecture does not exist even physically for them. In these situation since 2012 we are proceeding the program offering bilingual information[English/Japanese] about local tourism utilizing SNS(Social Network Service) through the mutual intercourse among universities in South East Asia mainly with University Malaysia Kelantan(UMK). In addition this fiscal year 2016 as “Building the Regional Archives utilizing Accentuated Reality(AR)” (Geitan Festa 2016 program), we accepted 3 study visit students and tried to dispatch information in SNS and build archives using 3D vertial reality movies. This paper tries to clarify the scope and overall picture of these programs.

Keywords: Internal Grobalization, Regional Archives, Accepting Overseas Students, Sharing Information for overseas tourist

１．問題の所在

2016年10月から11月にかけて、大分県立芸術文化短期大学における「サービスラーニング」の枠組みでマレーシアから３名の短期留学生を受け入れ、３Ｄバーチャルリアリティ映像（以下３ＤＶＲ映像と略記）によるアーカイブズ構築と県内の情報発信に取り組んだ。（学生らの所属、マレーシア国立クランタン大学:University Malaysia Kelantanは，以下UMKと略記)。本稿の目的は、その射程と全体像を明らかにしていくことにある。

参加した当事者である留学生３名、およびプログラムに関与した学生らの学びはもちろんのことであるが（４節に詳述)、副次的な効果として、本稿の大きな問題関心は、インバウンド向け情報の発信にある（５節に詳述)。

「おんせん県おおいた」商標登録（2013年）以後は言うまでもないが、日本国内、特に

観光分野における大分県の存在感が高まっていることは、さまざまな調査から伺い知ることができる。例えば、リクルート社が2016年８月に『じゃらんnet』会員11,713人を対象に実施したアンケート調査[①]では、計331の温泉地の中で、３位に湯布院、４位に別府がランクインしている。

ところが、こうした大分県の知名度の高まりも、ひとたびインバウンド向け情報発信（日本人による発信／外国人による発信）の次元でみると、非常に心もとない状態であると言わざるを得ない。たとえば紙媒体では、日本人が海外旅行時に用いる『地球の歩き方』や『るるぶ』『まっぷる』に該当する英文の観光ガイド『ロンリープラネット(lonely planet)』の掲載ページ数が問題を象徴している。全900ページ弱のうち、大分県についての記載は10ページしかなく、県庁所在地であるにもかかわらず大分市についての記述はまったく存在しない[②]。同様にインターネット媒体のTripadvisorでは、2016年末の時点で約800登録されているランドマークのほとんどは、主要なもの以外、日本語でしか閲覧することができない[③]。大分県への潜在的な訪問客が受け取れる（インバウンド向け）情報が存在していないということは、厳しい表現をすれば、物理的に存在していないことと同義である。

このような中、2012年度から継続している東南アジアの諸大学との交流の中で、これまでソーシャル・ネットワーキング・サービス（以下、ＳＮＳと略記）を活用した英語／日本語での情報発信に取り組んでおり、確かな手ごたえを感じている[④]。芸短フェスタ2015として取り組んだ「東南アジア交流ウィーク」[⑤] 以来、東南アジアと大分県との相互の情報発信の延長線上に、芸短フェスタ2016では「拡張現実による地域アーカイブズ構築」[⑥]としてサービスラーニングの枠組みで本学への留学生を受け入れ、通常の留学で提供されるような社会学その他の講義の受講だけでなく、本学学生を交えた地域活動と情報発信、また３Ｄ映像によるアーカイブズ構築に取り組んだ。本稿では、その射程と全体像を明らかにしていきたい。

２．短期留学受け入れに至るまでの経緯

（１）UMKでのマレーシア短期留学研修　マレーシアは、東南アジア内でシンガポールに次ぐ先進国であり、英語を公用語とする多民族国家[⑦]である。2012年度からこれまで、30名以上の本学学生が「マレーシア短期留学」（International Learning and Community Engagement、略称ILCOME（イルコム）プログラム[⑧]）を通して、マレーシア国立クランタン大学（UMK）に３週間滞在し、研修するプログラムを実施してきた。プログラム終了後も、SNSを用いて交流は続き、双方の学生がお互いに再訪しあったりするような継続的関係を築いてきている[⑨]。この中で、今回、初めて日本において短期留学を受け入れることになったわけである。これまでの交流の詳細は以下のとおりだ。

年度	参加人数 （学科別内訳）	実施期間	参加大学
2012 年度	10 名（国際 3、情コミ 7） 【UMK にて学会開催】 50 名が参加	2013 年 2 月 12 日～3 月 4 日	UMK（マレーシア）, Prince of Songkla University（タイ・以下 PSU と略記）
2013 年度	8 名（国際 5、情コミ 3） 社会人 1	2014 年 2 月 18 日～3 月 11 日	UMK（マレーシア）、PSU（タイ）
2014 年度	13 人（国際 8、情コミ 5）他大学 1	2015 年 2 月 23 日～3 月 18 日	UMK および Unisza（マレーシア）、PSU（タイ）
	【大分での学会開催】 ゲスト報告者 17 名・学内からのフルタイム参加は合計 18 名。	2015 年 1 月 23 日～1 月 25 日 location: Lecture Hall, 101, Oita Prefectural College of Arts and Culture,	University of Phayao、ChiangMai University（タイ）、UMK, UniSZA,、（マレーシア） Infosys Limited（インド）、Yonsei University、Hankuk University of Foreign Studies、Namseoul University （韓国）、帯広畜産大学、九州工業大学、
2015 年度	【大分での学会開催】 日本へ 11 名（タイより教員 3 名と学生 1 名、マレーシアより教員 1 名、学生 3 名[10]）大分市にて 50 名が関与。	治安上の理由で渡航を見送ったため、大分市にて国際学会のみ開催。プレイベント（10/31）の後、(11/3-4) (11/6-11)、iichiko 総合文化センター、学内大講義室にて報告会・クロージングイベント	UMK（マレーシア）、PSU、チェンマイ大学（タイ）、福井大学、笹川記念財団、明治大学

図　互恵的な関係＋交流（安倍 2014、p77）

研修の目的は、広義には、サービスラーニングによる地域貢献と学びであると言えるが、安倍（2014）に指摘したように、図示するような「互恵的な関係＋交流」が本プログラムの特長である。

通常の語学留学（英語）においてメリットを享受するのは、第二外国語として英語を学ぶ参加留学生のみであるが、本プログラムにはそれ以上に、図にみるような（「互恵的な関係＋交流」）がある。図中の通り、

日本語を学びたいマレーシア（タイ）の学生のコミュニティ（日本語教育部門およびその周辺の人々）に対して、日本語ネイティブスピーカーである学生らが滞在し、英語を中心とした語学、地域の文化や国際関係に関心を抱いて積極的に交流を図っていく[11]。したがって、東南アジア側の学生らは、日本語・日本文化を学び、地域活動をともにして親交を深めることができるが、他方、日本側の参加学生らにとっては交流の言語が英語であるため、(低コストで）英語を用いた海外生活の経験を積み、スピーチ等の機会も含めて英語・マレー文化に習熟してきた[12][13]。

（２）日本における国際学会の開催　これまでマレーシア短期留学に参加する日本側の学生は、成長のためのハードルとして、英語でのプレゼンテーションを２種類ほど作成してきた。（１）渡航前に作成する日本文化の紹介と、（２）現地で行うサービスラーニングの成果を素材として、滞在の最後に国際学会でおこなう成果報告である。後者は前掲の表に【学会開催】として見られるように，年度によって、ILCOME2013～2016と称する国際学会の例会の中での報告を課してきた。実施主体はAssociation for Intercultural Learning and Community Engagementという国際学術団体である（脚注に詳細を掲載しておく[14]）。2012年度、2013年度とマレーシア・クランタン州のUMKで開催していたが、2014年度、2015年度は大分県立芸術文化短期大学において開催することになった。その結果、研究報告・出版を目的として県外・海外から多くの研究者が来県し、開催期間中、大分県（大分市・別府市）に滞在してきた。観光的な面で、SNS等においてかなりのプロモーション効果が見られた。東南アジアの大学関係者を中心に、少なく見積って1,000名程度の facebook／Twitter ユーザーが“OITA”の情報に関心を持ってくれている。

（３）芸文短大での短期留学の受け入れ　述べてきたような短期留学と国際学会とを含むILCOMEプログラムのもとに、UMKとの交流を深めてきた。2016年度に入って、UMKにおいてマレーシア高等教育省（Ministry of Higher Education）から学生派遣の予算が確保できたため、本学に女子学生を引き受けてほしいという打診があり、受け入れ体制を模索し始めることになった。その後、筆者は、2016年６月８日（水）から12日（日）まで、UMK教員２名が事前調整のため来日した際、大分県内で協議をおこなった後、９、10日の両日に同行して、山口大学、下関市立大学、梅光学院大学等の国際関係の部署を訪問した。当時は、日本への留学者を合計６名程度予定していたが、UMK側がコストや受け入れ体制を検討した結果、梅光学院大学に２名、本学に３名の女子学生を派遣するということで調整をはじめることになる。次節に詳しく書くように、この時、期間は１ヶ月、予想される多くの希望者から特に適性があり優秀な学生を選抜すること等、受け入れ条件を協議した。これまでの海外ゲストによる大分県滞在は、基本的に短期間であり[15]、大分市・別府市のホテル等で事足りていたが、１ヶ月となると、住居・安全確保その他、多くの問題が生じてくることになった。

３．実施までの手順

７月最初の時点で関係の方々に相談に乗っていただき、手順としては、次のように計画し、学科、国際交流委員会、事務局に伺いながら進めていくことになった。

（１）参加学生の選定（女子学生３名＋他大学に同時派遣２名・９月上旬）
→（２）履歴書、成績データ、日本語レベル・身元が確かで優秀である旨を記した推薦状を受け取る
→（３）「覚書」の交換（９月下旬～10月）
→（４）渡航・プログラム実施（11月～12月の４週間）　（→翌年２月末、これまでの流れで本学からも10名程度の渡航を、海外情勢を伺いながら検討する）

当初、定めた目的は以下の通りである。

プログラム参加学生は、滞在する４週間のサービスラーニング、実習とレポート評価、振り返りの報告会、講義受講や学生との交流を通して、

a. 日本文化について学ぶ
b. 母国とは異なるコミュニティについて学び、サービスラーニングにおいて最大限の活動を試みる
c. （自国の状況も想定しながら）問題解決について批判的に分析する
d. 異国の環境下でコミュニケーション・スキルを磨く
e. マレーシアと日本それぞれの地域活性化、学術的な成果を追求する

また、具体的な実施方法を以下のように計画している。

本プログラムは、UMKと大分県立芸術文化短期大学との間の、文化と言語に関する交換留学を前提とする（添付資料を参照。授業料等は徴収しないという以外、それ以外の住居・交通・その他諸費用は、参加側の負担とする）。

・実施期間　４週間

・参加学生は、受け入れ側教員（情コミ・安倍、およびサービスラーニング担当者）の下で実地研修をおこなう。平日は、それぞれの週ごとに４つの業界についてのサービス・ラーニングと英語での情報発信、レポート執筆をおこない、講義や演習を受講する[16]。また、土日には、竹田市、中津市、臼杵市など従来型のサービスラーニング等に参加し、英語／日本語で情報発信をする。日本人のチューター学生のサポートのもと、数日間のホームステイや、ホームパーティ(食事会)も企画したい。

・受け入れ側教員は、学生をガイドし、学生の活動状況をモニターし、達成度をレポート・WEBへの書き込み等の形で、週ごとにプロジェクトを評価、UMK・マレーシア高等教育省に報告をおこなう。「マレーシア短期留学」でおこなってきたのと同様、プログラム最後に、公開報告会を実施する。

・４週間の滞在期間を、基本的には１週間ずつの４セッションに分割する。

一日あたり８時間×５日＝４０時間／週
４０時間×４週間＝１６０時間（土日の活動時間を除く）
（先方大学では、効果的な学習時間を５０％と計算して、８０時間、２単位に相当するものと考える）

・日本での学習を終えた後、学生は速やかに自国の大学に戻り、レポート、学習記録、単位読み替え申請書の提出をおこなう。“Community and Economic Development”（codeUSK 4012）としてUMKの２単位を認定する[17]。

全４週間のうち、セッションごとの活動は実施案の通りで、１週間ごとに以下の（１）から（４）までの学習の流れを想定した。

（１）概要・対象地域の把握
→　（２）課題テーマ設定
→　（３）調査・情報発信の活動実施・分析レポートの作成
→　（４）振り返り・改善策の提案

（実施案）
１週目：　大分県内・市内の概要（日本の都市の機能と運用形態について把握する。マレーシアにはないアイディアを発見し、自国に取り入れることができるかどうか等の視点で分析する）。（協力・大分市役所・企画部企画課等）
２週目：　福祉関連施設等の訪問（日本のケア業界が利用者満足のためにどのような工夫をしているかを学ぶ）
３週目：　文化関連施設の訪問（日本の伝統文化がどのように保存され、人々がどのように認識しているかを学ぶ。マレーシアの価値観と文化に関する施策との比較）
４週目：　産業関連施設の訪問（商店街や商業施設・企業を訪問し、マレーシアとの比較もしながら、日本人がどのように販売・観光などのビジネスを進めているのかを学ぶ）

さて、今回、関係の方々に労力を割いていただいたもっとも重要な問題が、受け入れ体制の問題である。これまでの日本からのマレーシア短期留学プログラム参加者は、滞在先の大学UMKにて英語の授業を受けて英語で交流するものの、「海外語学研修」としてではなく、学科を超え全学を対象として情報コミュニケーション学科が募集する（海外版）「サービスラーニング」として実施してきた。それゆえの機動性が大きかった。つまり、これまで想定していたのは、何よりも危機管理、そして数多くあるサービスラーニングのプログラムの一つとして、既存の枠組みに沿ったカリキュラムとの整合性、加えて、大学内の国際交流委員会・事務局などでの企画・広報と進捗・事後報告という程度であった[18]。このために機動的に動くことができたというメリットもあったのだが、今回は先方の大学の制度でも制度的に固まっていない、かつ単位付与をしなければならない派遣学生をこちらが受け入れるという想定せざる事態になったのである。

多方面に相談に乗っていただいて、基本的に情報コミュニケーション学科のサービスラーニング、カリキュラム体制のもと、筆者の担当講義、関連講義、学外の日本語教室も含めて、業務に差し支えない範囲で単位認定等の審査も担当することになった。また、全学の施設利用のため、教務学生部、情報ネットワークセンター（利用アカウント等の作成）、図書館にオリエンテーションをお願いした。

こうした結果、全学が関与せざるを得ない体制となったため、「覚書」（合意覚書：MOA =Memorandum of Agreement）を交わすことにもなった⑲。すると、プログラムを進めるのはこれまで同様に個人間のつながりであっても、ひとたび法的な契約関係を想定すると大学のみならず県などの組織まで視野に入れることになり、多くの指摘を受けて学ぶところが多かった。すなわち、なぜ県立短大、そして情報コミュニケーション学科でマレーシアの大学と交流を持つべきなのかという「マレーシア選定の意義と位置付け」を改めて問い直すことにもなった。以下のように、日本の「内なるグローバル化」がキーワードとなる。外に向かって出ていくグローバル化ばかりではなく、外国企業や外国人が日本国内で積極的に活動できる環境を整備することによって、副次的なメリットを得るという考え方である⑳。ローカルに活かすためのグローバル化が「内なるグローバル化」といえる。

本学側にとっては、多くの学生が日本にいながらにしてマレーシアからの留学生と交流できるため、従来の短期留学のメリットの一部を享受できる契機となる。東南アジアの文化に触れ、親日的なマレーシアの人たちとのネットワーク形成が、参加者らの将来の選択肢を増やすことになる（文末脚注⑨、学生の感想も参照）。他方、留学生３名は、サービスラーニングの枠組みのもと、大分県の地域資源について英語で情報発信しながら学びを深めることになる。したがって、これに加えて、英語・日本語での情報発信による大分県へのインバウンド効果（観光等も目的とする来客）が見込めることもある。「グローバルな活動がローカルな県内の活性化・学びのためにも有益である」という考え方である。また今後は、英語の語学力次第で本学卒業生がUMKにおける３年次編入をするという進路選択も視野に入れている。

４．来日・短期留学生受け入れの記録と反省

実際のプログラムは、UMKでの試験準備やインターンシップのため、予定よりかなり前倒しでの実施となった。実績を書き加えたスケジュール表は、以下に示すとおりである。

講義としての学修内容はおおよそ、社会学（現代生活論）、情報社会論をそれぞれ４回、発展演習・卒業研究への参加が約７回、１回２時間の日本語・日本文化教室に７回となった。大分市内を拠点として活動しつつ、サービスラーニングとして別府市（10/16, 11/4, 11/5, 11/6, 11/8）、竹田市（10/21）、中津市（10/29）、佐伯市（11/3）、臼杵市（11/3, 11/6）、豊後高田市（11/6）、由布市（11/8）などを訪問した。

Appendix A

TENTATIVE PROGRAM
OPCAC Study Visit – ILCOME 2016 (~~23~~ 16 OCT 2016 – ~~18~~ 12 NOV 2016)
UMK X OPCAC (Oita Prefectural College of Arts and Culture, Japan)

		7.30	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	HOTEL	MEAL B	MEAL L	MEAL D
1日	10/16 2016 (日)	福岡空港到着、打ち合わせ・移動				宿舎へ	学内見学	睡眠			全体打ち合わせ	別府モスク・ハラル情報収集					UENO Home	✔	✔	–
DAY2	10/17 2016 (月)	朝食、大学へ移動		・教務 ・図書館 ・情報処理オリ				卒研ゼミ									UENO Home	–	✔	–
DAY3	10/18 2016 (火)	朝食、大学へ移動		自己紹介 @地域特講	【講義】情報社会論		昼食 (学内放送CM)	マレーシア教員2名と市内(Prof. Farok & Toshi sensei)									UENO Home	–	–	✔
DAY4	10/19 2016 (水)	朝食、大学へ移動		【講義】現代生活論		【講義】社会調査法 一昼食 (学内放送CM)		(教員2名) 学長室訪問 発展演習			マレーシア教員2名・歓迎の夕食会(2階広間)						UENO Home	–	✔	✔
DAY5	10/20 2016 (木)	朝食、大学へ移動		教員見送り 情報処理室・図書館にて準備作業							歓迎パーティー (学食)						UENO Home	–	–	✔
DAY6	10/21 2016(金)	朝食、大学へ移動		(株)瑞城 見学		日本語教室 (アイネス)		まちづくり組織	竹田市役所	副市長室	地域づくり協力隊 城下町見学		大分市内見学				UENO Home	–	–	–
DAY7	10/22 2016 (土)	朝食、大学へ移動		夢色音楽祭									Dinner, Free & Easy				UENO Home	–	–	–
DAY8	10/23 2016 (日)	朝食、大学へ移動		夢色音楽祭									Dinner, Free & Easy				UENO Home	–	–	–
DAY9	10/24 2016 (月)	朝食、大学へ移動		大分市内見学				卒研ゼミ			夕食会(2階広間)						UENO Home	–	–	✔
DAY10	10/25 2016 (火)	朝食、大学へ移動		Preparation for 2nd week	【講義】情報社会論								Dinner, Free & Easy				UENO Home	–	–	–
DAY11	10/26 2016 (水)	朝食、大学へ移動		【講義】現代生活論		【講義】社会調査法 一昼食		発展演習					Dinner, Free & Easy				UENO Home	–	✔	–
DAY12	10/27 2016 (木)	朝食、大学へ移動		国際プラザ・県立美術館・商店街見学									日本語の講義 @コンパルホール				UENO Home	–	–	–
DAY13	10/28 2016(金)	朝食、大学へ移動			日本語の講義 @アイネス		国際プラザ、公設市場、明野				魚釣り(かんたん公園)		歓迎パーティー(2階広間)				UENO Home	–	–	✔
DAY14	10/29 2016 (土)	朝食、大学へ移動			【サービスラーニング】 中津市コスモス園												UENO Home	–	–	✔
DAY15	10/30 2016 (日)	朝食、大学へ移動		芸短祭				子供英語	芸短祭・夕食								UENO Home	–	✔	✔
DAY16	10/31 2016 (月)	朝食、大学へ移動		大分市内見学				卒研ゼミ					夕食会				UENO Home	–	–	✔
DAY17	11/1 2016 (火)	朝食、大学へ移動		Preparation for 3rd week	【講義】情報社会論								Dinner, Free & Easy				UENO Home	–	–	–
DAY18	11/2 2016 (水)	朝食、大学へ移動		【講義】現代生活論		【講義】社会調査法 一昼食		発展演習		JA全農大分／ミカン畑							UENO Home	–	✔	–
DAY19	11/3 2016 (木)	朝食、大学へ移動		[SL] 蒲江・福祉施設・魚祭り									日本語の講義 @コンパルホール				UENO Home	–	✔	✔
DAY20	11/4 2016(金)	朝食、大学へ移動			日本語の講義 @アイネス		【サービスラーニング】野津原・田ノ口地区						JA全農大分		大分駅夕食		UENO Home	–	✔	✔
DAY21	11/5 2016 (土)	朝食、大学へ移動		APU国際会議			Lunch	APU国際会議								別府市 ・夜カフェ	UENO Home	–	✔	✔
DAY22	11/6 2016 (日)	朝食、大学へ移動		[SL] 豊後高田市・そば打ち、まちづくり公社、杵屋さん他 大分合同新聞取材 別府市・着物フェスティバル 臼杵市・竹宵(夕方5～10時)													UENO Home	–	–	–
DAY23	11/7 2016 (月)	朝食、大学へ移動		[SL] Oita Tourism Office 上野苑				卒研ゼミ				魚の調理		オープンカレッジ・夕食			UENO Home	–	–	✔
DAY24	11/8 2016 (火)	朝食、大学へ移動		Preparation for 4th week	【講義】情報社会論		[SL] 別府・湯布院での情報発信										UENO Home	–	✔	✔
DAY25	11/9 2016 (水)	朝食、大学へ移動		【講義】現代生活論		【講義】社会調査法 一昼食		大分市内・学生交流									UENO Home	–	✔	–
DAY26	11/10 2016 (木)	朝食、大学へ移動											日本語の講義 @コンパルホール				UENO Home	–	–	–
DAY27	11/11 2016(金)	朝食、大学へ移動			日本語の講義 @アイネス		報告準備など				報告送別会 (大講義室)	オープン カレッジ "100倍アニメ"					UENO Home	–	–	✔
DAY28	11/12 2016 (土)	朝食、大学へ移動		Report Meeting & Exhibision at TOTA Building (presentation event) [Toast Masters Club@18:30–]																

住環境について　２節に振り返ったように、これまでも海外ゲストによる大分県滞在は多かったが、基本的に短期間であり教育上の責任も生じていなかった。全てのケースで大分市・別府市のホテル等で事足りていたが、１ヶ月となると、住環境の整備を中心として、多くの問題が生じてくることになった。

損害賠償・医療などを含む海外旅行保険については、UMK側が準備・給付したが、受け入れにあたって、通学圏内の快適な宿舎とその保証を用意することが必要となった。しかも、マレーシア高等教育省からの支援は、大分・下関に滞在する５名で分割すると費用は十分ではなく、見込まれる半額程度の出費が個人負担となったため、できるだけ出費を避ける必要にかられた。宿舎を確保するため、おおいた国際交流プラザ、市役所（住宅供給課、文化国際課）、大学コンソーシアムおおいた、不動産会社、ウィークリーマンション３社と探していったが、費用が条件に合わなかった㉑。その後、大学周辺の空き物件のオーナーに直接、何件か交渉したが、最終的には、紹介を通じて「インターナショナル出あいの村」という国際交流・地域貢献の実績をもつNPOが所有している一軒家に入居させ

ていただくことになった[22]。安全管理としては、無線LANルータをレンタルして３名で共用することによって常時、インターネット回線に接続し、skypeから電話がかけられるように通信手段を確保した。NPO「出あいの村」関係者や筆者による住居周辺の見回りは、基本的に毎日実施し、基本的には学生のほとんどの移動にあわせて、貼り付くことになった。

その他、日常生活について　３名の学生のうち、１名は中華系マレーシア人、２名はマレー系だったため、人目に触れるところでは頭部にヒジャーブという被り物をしていた（帰国時に実施したアンケート調査[23]では本人たちも、来日して数日、日本人から変な目でみられないか不安だったと述べている）。学内、プライベートとも、食べ物とお祈り等を中心とするイスラムの習慣に関することに注意しつつも、頻繁に学生・社会人との食事をともにする機会を設けることができた。基本的に学生らは、宿舎での自炊で食事をすませた。宿舎が大分市立美術館の付近で上り坂がきつかったこともあり、交通手段として想定していた自転車を用意することができなかった。とはいえ、宿舎が駅にも大学にも15分程度の徒歩圏内にあるため、生活のスタートアップに際して、コンビニエンスストアやレストラン、書店やスーパーマーケットなどを探すところから始めて、楽しい日常生活を送ることができたようである。

サービスラーニング実施にともなう外部組織との連携について　上記の表中にあるような様々な外部組織とのスケジューリング・調整には苦労したものの、結果、留学生の来訪をとおして、筆者の個人的なネットワークが広がった結果となった。各自治体での行政組織はもちろんのこと、まちづくり公社、また、JA全農おおいたのご縁で紹介いただいたみかん農園２件などは、本学学生らにとっても貴重な体験となった。魚釣りや各種の料理、国際体験など、本学学生を含めて継続的に支援をくださった安藤氏・鳥居氏・野田氏（NPO出あいの村）、退職された方を含む方のボランティアで運営されている日本語教室「あいうえおCLUB」など、非営利で活動しておられる方々の善意を受け、学生ともども感謝に堪えない。

合同新聞（朝刊）　2016年(平成28年)11月9日　水曜日

打って食べて　そば堪能

豊後高田　芸文短大の留学生体験

県立芸術文化短期大学の留学生らが6日、日本文化を学ぶため、豊後高田市でそば打ちなどを楽しんだ。

同大学情報コミュニケーション学科の安倍尚紀専任講師が地域交流活動の一環として、マレーシアの留学生、日本人学生ら計10人と参加した。

豊後高田そば道場でそば打ちを体験。粉の水回しや、めん棒を使った生地延ばしなどに挑戦し、昼食に打ちたてのそばを堪能した。和気あいあいとした雰囲気で、「細く切るのが難しかった」「日本のそばを食べるのは初めて」などと話していた。

その後、昭和の町を散策し、商店主らと交流した。

そば打ちを体験する県立芸術文化短期大学の留学生ら

2016年11月９日（水）付けの大分合同新聞で、マレーシアから芸文短大に来ている留学生３名、本学学生と教員らの地域活動の様子が掲載された[24]。その他、ところどころ、脚

注にてダイジェスト的に写真を掲載しておきたい[25]。

５．拡張現実（AR）による地域アーカイブズ構築

最後に、これまでも継続してきたSNSによる情報発信とあわせて、今回はじめて、３Ｄ映像による地域アーカイブズの構築を試みた。３Ｄ映像によるバーチャル・リアリティ（3DVR）について、当初予定していたGoogle Cardboardでの公開までは至らなかったが、一時的な成果として、多くの人がアクセスできる３Ｄ版youtubeに作品リスト「【３Ｄ VR動画】」内に15点の映像作品を公開することができた[26]。VR Tubeの類のアプリケーションとSIDE BY SIDE方式の安価な３Ｄメガネを用いると、簡単に世界に没入することができる[27]。

芸短フェスタ2016「拡張現実による地域アーカイブズ構築」[28]の狙いは次のとおりだ。大分県内（および東南アジア）の市街地や観光地を対象として３Ｄ記録等を用いて、インターネット上で視聴できる拡張現実の地域アーカイブズを構築することである（英語・日本語で発信）。基本的にはインターネット上で公開するが、１日のみ、10月から来日した留学生、研究室OBゼミ生の協力も得て竹町アーケードのオアシスタワー側TO-TA（大分県・芸術文化ゾーン）にて「オープンラボ」と称した報告会を行なった（出張研究室、交流ワークショップと成果の展示）。11月12日に40名ほどと、思ったほどの参加が得られなかったが、アーカイブズについては以下で恒久的に公開する予定である。１月初旬の時点でインターネット上での動画再生数は500超である。

（http://jakyo.com/n-abe/index.cgi?page=%B7%DD%C3%BB%A5%D5%A5%A7%A5%B9%A5%BF2016%A1%D6%B3%C8%C4%A5%B8%BD%BC%C2%A4%CB%A4%E8%A4%EB%C3%CF%B0%E8%A5%A2%A1%BC%A5%AB%A5%A4%A5%D6%A5%BA%B9%BD%C3%DB%A1%D7 ）

動画リストを再生すると、大分県、クランタン州を主として、各１分～２分程度の３Ｄ映像作品を視聴することができる。VR Tubeの類の３Ｄアプリケーションと３Ｄメガネを用いれば、メガネで見ている方向に連動して視野が動き、向いた方向を見渡すことができ、VRの世界に没入することができる。日本軍の塹壕内部やマレーシア・クランタン州のマイナーな観光地など、通常、アクセスの悪い場所も対象としている。これらを空間的な制約を超えて視聴体験をもたらすものだとするならば、時間的な制約を超えるものとして、取り壊される場所の記録資料「【３Ｄ　VR動画】芸文短大・旧ダイヤモンド広場の記録（2016年12月15日）」は長期的な価値があるだろう。

さて、今回のUMK学生３名の短期留学では、サービスラーニングで訪問する大分県内の各所で、SNSによる情報発信をするとともに、上記のような３Ｄ　VR映像を撮影してもらった。日本人にとっては日常風景として見逃している対象が、留学生にとっては面白いものとして捉えられたようである。例えばアンケートにも記述でいうと、「宿舎の徒歩圏内に６軒も存在するコンビニエンスストア」であり、同エリア内に「数え切れないほど立ち並ぶ自動販売機」、「ウィンドウショッピングをするためだけに、お店に入ることがいつも楽しみだ」といった具合だ。日本人学生にとっても、留学生らとともに歩き、必要に応じて質問をやりとりしながら見直す日常の風景となれば、少し異なって見えてきたことだろう。

写真や記事をSNS（FacebookやInstagram）に【位置情報付きで】投稿してもらった。時には、サービスラーニング中のインタビューや観察によって収集した情報をもとに、投稿を行うときもあった。未完成の残された作業として、これらの写真・動画や記事などの投稿をソーシャルマップとして地点情報に紐付けて落としこんでいくと地域アーカイブズとして有用なものになるだろう。これまでに用意したクランタン州でのページ「University Malaysia Kelantan Oita Prefectural College ILCOME program」に類するデータベースとしたい。閲覧者は、Google Mapを自由に拡大縮小したり、あるいはタグ付けしたカテゴリから興味のあるポイントを選択したりして、詳細な場所を確認した上で写真・動画や書き込みを閲覧することができるというわけである。こうした意味情報を付与すると、改めて現実が違ったように見えるようになり、拡張現実としてのアーカイブズ化が進んでいく。

６．結びにかえて

本稿に見てきたように、内なるグローバル化をキーワードとして、短期留学生を受け入れ、サービスラーニングの中で地域アーカイブズの構築を進めてきた。この中で、本ILCOMEプログラムは、短期留学・国際学会ともに、SNSにおけるグループ／個人アカウントでの情報共有機能を活用しながら実施している。結果として、参加学生や報告者同士の交流は続くため、教育・研究・地域貢献において多くの相乗効果を期待できる。今回の留学生受け入れに関して、筆者の講義「現代生活論」「情報社会論」の28年度後期授業評価アンケートでも、留学生３名を交えたグループディスカッションや授業中のキーワードの翻訳説明などを通じて交流・内容理解を深められたというコメントが複数見られた。今後、より仕組みを整備していき、メリットを見えやすくして受益者を増やしていくことが今後の課題である。

今後、クランタン州の観光局や郷土史家たちのグループとの協働を計画しているところである。というのも、クランタン州には、旧日本軍に関係ある貴重な歴史的痕跡が数多く存在するにも関わらず、日本人はもちろん現地の人々にもあまり知られず風化しつつあるからである㉙。そもそもマレーシアが親日的な国であること、そして歴史的なつながりの深さから、現在は日本人観光客が非常に少ない地域であるクランタン州は可能性を秘めた地域である。それゆえ、脚注④後半に示したように、現地の新聞では我々が不在の場で「Oita」の名前が登場するほどに、これまで継続してきた交流の相乗効果は高まっている。今後も、SNS投稿や動画アーカイブスの構築を促進しながら、本稿冒頭に記したような大分県のインバウンド向け情報発信の問題も射程に入れて、ローカル／グローバルな地域活動にとり組んでいきたい。

注

① 調査時期：2016年８月25日（木）～ 2016年８月31日（水）
調査対象：『じゃらんnet』会員　調査方法：インターネット上でのアンケートを実施
回収数：11,713人　有効回答数：11,713人　対象温泉：計331の温泉地を選択肢として

設定

② 2015年版。10ページ中の内訳は、別府７ページ、湯布院２ページ、臼杵と国東半島１ページ弱である。790ページまで都道府県別ガイド。2015年度版には、温泉をガイドしているページ（p29）にも大分県の温泉は登場しない。兵庫県の城崎温泉（p422）、石川県のかよう亭温泉(p250)、和歌山県の熊野本宮温泉(p417)、群馬県の宝川温泉(p286)、東京都・八丈島の裏見ヶ滝温泉(p189)の５つが紹介されている。

③ Lonely Planetに並んで有名な英文の観光ガイドtimeout等では、空港に近い大都市圏中心のガイド（city guide）中心であるため、大分県は触れられることもない。また、先にあげたLonely Planet誌WEB版が2010年７月に発表した温泉ランキングでは、「竹瓦温泉」（別府・九州）が辛うじて９位にランクインしている。そこでは、1879年（明治12年）に創設、1938年（昭和13年）に完成、「シンプルイズベスト」という紹介だ。同書のコラムやこうした外国人による視点は特有のセンスに基づいており、学ぶ点が多い。（https://www.lonelyplanet.com/japan/travel-tips-and-articles/68219）

④ そもそも大分県は、国内観光においては定評があるため当然だが、これまでILCOMEプログラム関連で来日している大学関係者はほとんど「訪日は大分県が初めて」であり、リピーターとなったり、親しい友人を紹介して連れてきている。今回、受け入れることになった短期留学生３名（さらに加えて、梅光学院大学に派遣された２名）も同様に、訪日は大分県が初めてである。

また、クランタン州においても、大分県、大分県立芸術文化短期大学（OCPC）の名前は独り歩きして登場するようになってきた。「ここに日本人がやってきて、クランタン文化に好意的な評価をしていった」という文脈でこれまで訪問した国立高校その他の広報誌、壁画などにもみられる。例えば、2016年９月17日のDaily Sinar誌では、われわれ不在の場であったが、芸文短大の大学名を記載したうえで、クランタン州の歴史的な環境、芸術や文化を賞賛した写真やコメントが引用されている（Bachok行政区のJelawat地区、Kubang Telagaにあるホームステイ村の取材にて）。

ZAIMATULJUWITA ABDULLAH, 2016, “Kubang Telaga lubuk perpaduan”, in Daily Sinar 17 September 2016

http://www.sinarharian.com.my/mobile/edisi/kelantan/kubang-telaga-lubuk-perpaduan-1.563239

⑤ 2015年度芸短フェスタ「東南アジア交流ウィーク」では10万円の予算を頂き、できるだけ予算をかけずに、日本に興味を持ち・かつ影響力の強い東南アジアの大学教員や学生に対して研究交流の機会を提供し、大分県の良さについてSNSや口コミのプロモーション推進した。

⑥ 2016年度は９万円の予算を頂いた。５節に詳しく見るような大分県内（および東南アジア）の市街地や観光地を対象とした３Ｄ映像記録等を用いて、インターネット上で視聴できる地域アーカイブズを構築してきた（英語・日本語で発信）。

⑦ Complete Atlas of the World（2016）のデータによると、マレーシア国内の人口比率は、12％のオラン・アスリ等原住民を含むマレー系（約65％）、華人系（約26％）、インド系

（約８％）、その他１％である（DK Publishing、p301）。

⑧ 2012年度、2013年度、2014年度、2015年度、そして今年度と５年連続で実施してきたことになる。正確にはILCOMEプログラムは、毎年２月から３月にかけて、（１）マレーシア短期留学研修と呼ばれる国際交流プログラム、（２）ILCOME2013～2016と呼ばれる国際学会の総称となっている。http://jakyo.com/n-abe/ilcome/を参照。

⑨ マレーシア短期留学に参加後、クランタン州のUMKを複数回、訪問した学生も多数出てきている。2016年９月末にもY.S.さん（長崎大学に編入学・情報コミュニケーション学科卒）、M.S.さん（佐賀大学に編入学・国際総合学科卒）らが、マレーシア国立クランタン大学を再び、訪問したところであった。2017年２月からは、マレーシアへの長期滞在を予定している卒業生もいる。

2014年度参加者Ｉさんの感想より

「UMKというマレーシアの国立大学では、すべて英語で授業が行われ、マレー語やマレーシアの伝統舞踊を毎日二時間練習した（クロージングセレモニーで披露するため）。午前中は語学の講義で午後は移動して史跡を訪問したりした。コタ・バル市内を観光し、銀加工の作業場を見学した。先日あったマレーシア大洪水の場を見学したり、旧日本軍の石碑を見た。その他、自分たちが作ったプレゼンテーションを本格的な英語で話す練習をし、発表をした。UMKの他のキャンパスも訪問し様々な学問を専攻している学生と交流を深めた。

マレーシアは多民族国家であり、マレー系民族・インド系民族・華人民族の人々を中心に交流を持った。英語しか伝わらない状況でコミュニケーションをとるのはとても大変だった。しかし、電子辞書やジェスチャーなどを使って交流し最後にはみんなとても仲良くなった。

日本は島国であるがゆえ他の国との関わりが他国と比べて少ない。しかし、マレーシアではたくさんの民族と行動して、それぞれの宗教などがあり文化がある。それは私たちが思っているものとはまったく違った。特にイスラム教に関しては学生からいろいろ教えてもらった。自分が思っていたイメージを見事に覆られた。宗教についてもっと深く学びたいと思った。旧日本軍の石碑を実際に見に行ったときに、日本から離れたマレーシアの地で日本語で書かれた石碑を見ると胸にこみ上げるものがあった」。

2014年度参加者Ｋさんの感想より

「私は正直マレーシアに行く前まで、自分が何をしたいのか分からずに適当に毎日を過ごしてきた。なるようになると思って受験や検定にも全然ちからが入らずにいて、自分が何をしたいのか分からないくせに特にしたい事を探す気持ちも起こらなかった。でも、マレーシアへ行き自分が日本でしていた当たり前のことに感謝し、英語でコミュニケーションを取る事にわくわくしている自分に気づき、同時に英語力の低さを知り、もっともっと学びたいと思った。この先、何となく就職して何となくお金を稼ぐ自分のやりたい事など分からずに過ごす何となくの人生は嫌だと初めて思った。遅いかもしれないけど、今から

やれる事をやって必死になりたいと思うようになった」。

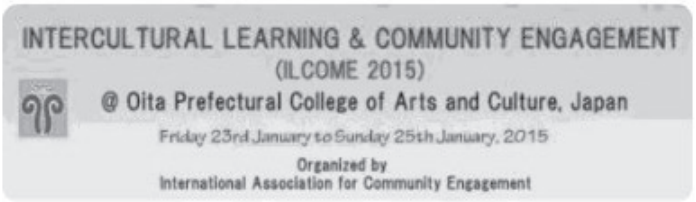
⑩ 2015年７月10日（金）～12日（日）には、マレーシア短期留学で交流をもったタイの大学（Prince of Songkla University）から教員１名・学生１名が本学を訪問し、10名の学生が学内で、５名の学生が大分市中心市街地で、２名の学生が別府市で交流を深めた。
写真左は表敬訪問の様子、写真右は、マレーシア短期留学以来の再会を懐かしんでいる参加者ら。

⑪ 主にUMK側では、講義の都合などを勘案しつつ、毎日、交代で常に学生による10人程度のサポート担当の学生グループが、日本人留学生と交流し、親交を深めることになる。2008年の専攻開設以来、UMKでは何千人もの学生が副専攻として日本語を専攻しており、学生の間では人気科目となっている。それだけに、特に同世代の日本語のネイティブスピーカーとの直接の交流が切望されている。

⑫ 滞在中に使用する言語はすべて英語である（キャンパス内でも、英語で自由に話しかけてほしいと書かれたバッジをつけて生活する）。学生にとって、英語を用いて講義を受講し、友人に日本文化や日本語を教え、現地の文化を学び、現地でのサービスラーニング活動を触媒（Catalyst）として、共通メディアとしての英語を鍛錬していく仕組みが整っている。

⑬ さらには、プログラムプログラム実施の事前／期間中／終了後にも、Facebook・LINEを中心とするSNSメディアを活用したことも、良い効果を生み出している。SNSを通じて、集まり、日常的に交流をはかることにより、学生たちの交流は深く継続的なものになる。日本にいてはなかなか理解することができないが、世界で２番目に多いイスラム教徒（16億人）の文化に親しみ、生涯の友人を得るきっかけとなっている。

⑭ 研究テーマとして、地域貢献（community engagement）と文化を越えた学び（intercultural learning）を掲げている。東南アジアと東アジアを中心とするおおよそ100人程度の大学教員からなる緩やかな組織体勢で運営している。特に年会費等は徴収せず、毎年の年次大会や共同研究など、アカデミックな活動をベースとして展開している。東南アジア事務局代表は、Director Professor, Farok bin Zakaria(UMK)、北アジア事務局代表　安倍尚紀（大分県



立芸術文化短期大学)。2012年度には国際交流基金の支援を受け、日本国内で出版物が出せるような仕組みを整えている。

以下は、学会例会の４つのバナーである。上から順番に（１）（２）（３）（４）として、簡単な記録を記しておく。

（１）International Colloquium of Intercultural Learning and Community Engagement (ILCOME2013) (http://sociology.kakoku.net/)

Conference Days: from 26rd to 28rd Feb., 2013
location: University of Malaysia Kelantan, campus Bachok (16070 Bachok, Kelantan, Malaysia)

（２）International Colloquium of Intercultural Learning and Community Engagement

(ILCOME2014) (http://jakyo.com/index.cgi?page=ILCOME2014)

Conference Day: on 10 March, 2014
location: PBI Meeting Room, University of Malaysia Kelantan, campus Bachok(16070 Bachok, Kelantan, Malaysia)

（３）International Colloquium of Intercultural Learning and Community Engagement (ILCOME2015)(http://jakyo.com/index.cgi?page=ILCOME2014)

Conference Day: from 23rd to 25th January, 2015
location: Lecture Hall, 101, Oita Prefectural College of Arts and Culture,
Departments of Information and Communication 1-11 Ueno-ga-oka-Higashi, Oita city (870-0833 Oita Japan)

（４）International Colloquium of Intercultural Learning and Community Engagement (ILCOME2016)
(http://jakyo.com/n-abe/index.cgi?page=%B7%DD%C3%BB%A5%D5%A5%A7%A5%B9%A5%BF2015%A1%D6%C5%EC%C6%EE%A5%A2%A5%B8%A5%A2%B8%F2%CE%AE%A5%A6%A5%A3%A1%BC%A5%AF%A1%D7)

Conference Days: from 6th to 11th Nov. 2015
location: Iichiko Culture Center @B1F in Oasis Tower / Lecture Hall, Oita Prefectural College of Arts and Culture

Saturday, 7th Nov. 2015
Morning Session "Education and Intercultural Communication" (Moderator: Naoki DN ABE)

1. "Introduction and Objective of the Program Geitan-festa and ILCOME"
Dr. Naoki DN ABE(Oita Prefectural College)
2. "Effective Learning of Japanese Language Acquisition based on Cerebral Mechanisms"
Dr. Yasuyuki MATSUURA(Prince of Songkla University)
3. "Modern Japanese Politics and Diplomacy: Focusing from Civilian Control over the Military"
Dr. Yuta KOMORI(THE SASAKAWA PEACE FOUNDATION)
4. "A Basic Study of Human Resource Development in Developed Countries: Focusing on Advanced Human Resources Development"
Dr. Riho GOJO(Meiji University)

Communication Time & Lunch
Afternoon Session "Observation of ILCOME-SEED program in Malaysia -Thailand-Japan"
(Moderator: Naoki DN ABE)

1. Dzulhilmi Bin Mohammad Halil (University Malaysia Kelantan)
2. Nur Aiman Khairulannasuha Binti Azhar (University Malaysia Kelantan)
3. Johnson Chung Yiin Wong (University Malaysia Kelantan)
4. Mika Kitahara (University Malaysia Kelantan)

Tuesday, 10th Nov. 2015
13:00- at Lecture Hall, Oita College
1. "Health Situation and Future Task of ASEAN: Following the announcement of ASEAN-Japan Health Initiative"
Dr. Yasuyuki MATSUURA (Prince of Songkla University)
2. "An Introduction of Cooperative Education in Mathematics and Physics from an In ternational Perspective"
Dr. Hiroki TAKADA (University of Fukui)

※期間中、チェンマイ大学からAnukul Chawapon氏がDr. Anan Leetrakulを連れて再来訪し、毎年マレーシア短期留学でお世話になっているUniversity Malaysia KelantanとPrince of Songkla Universityから教員、学生が多数、参加した。これに合わせて福井大学、笹川記念財団、明治大学、東南アジアに関連をもつ研究者らが集まり、数学教育、東南アジアの軍政、等講演している。同時に「芸短フェスタ2015」として日本側の展示も実施している。

⑮ その他、UMKでは、ILCOME2013プログラム後、支援くださった在マレーシア大使館その他の協力もあり、財団法人日本国際協力センター（JICE）が主催してASEANの10カ国から学生を日本に招待するJENESYS2.0プログラム(21世紀東アジア青少年大交流計画）に前代未聞の17人もの学生が採択され、来日の機会を得た。人数は減ったものの、翌年以降もコンスタントに採択は続いているが、スケジュール上、大分県にくることはない。

⑯ 水曜日と金曜日には日本語教室（明野・東春日町)。地域活動室・安倍研究室も利用しながら、月曜日・水曜日の定時に、本学学生との交流をはかる。出席可能な講義に出る（現在、安倍担当の「現代生活論」「情報社会論」「発展演習」)。図書館、情報処理学習室を利用して、SNSを用いた情報発信をし、レポート等を作成していく。

⑰ また、「日本語のネイティブ教員や地域住民のもとでプロジェクトおよび情報発信を進めるため、UMKにおける「日本語レベル３」の学習時間とみなすこともできる」と記載した。

⑱ 短期留学先でのさまざまな講義、見学、公的機関や要人の表敬訪問、地域貢献の意味合いを含むサービスラーニングなど、具体的なプログラムの内容の検討・作成については、UMK側の日本語教員および学部長と連絡を取り合い、進めてきた。現在のところ、先方

の大学では、１件のアクティビティごとに対して１名以上の教員（実行責任者）が貼り付けられている。また、大学の提供するバス３台程度（ドライバー付き）、元警察官のボディガード、公用車数台と運転手３名程度、カメラマンやコンピュータ技術者も、常時、協力していただけるという充実した体勢のもと実施させていただいてきた。

⑲ 準備時間も十分ではなかったため、今後の関係の深化を期待しつつこちらの日本語では「覚書」（合意覚書）、すなわち、英文ではMOU（Memorandum of Understanding）より一段階低いレベルのMOAとなった経緯がある。現時点では英語の文言に修正の必要があり、調印しているのは日本語版のみという「見做し合意状態」である。

⑳「日本再興戦略 -JAPAN is BACK-」（平成25年６月14 日閣議決定）中の日本産業再興プランに大学を含めてさまざまな施策が打ち出された。「『日本再興戦略』改訂2014」（平成26年６月24日閣議決定）では、日本人・日本企業の海外進出を念頭に置いた「外へのグローバル化」に対して、「内なるグローバル化」と表現されているが、出ていくばかりではなく外国企業や外国人が日本国内で積極的に活動できる環境を整備するという点でも重要である。「内なるグローバル化」の視点を考え併せれば、今後の日本における業務は、国内／海外の単純な二分法では捉えきれない。「内なるグローバル化」の進展によって外国企業や外国人の日本国内での活動が活性化すれば、海外勤務希望者は必ずしも海外勤務でなく国内勤務であっても国際的な業務に携わるという道もありうるし、「地元志向」で地元就職しても国際的な業務に携わらざるをえないこともあろう。

㉑ 特に、ウィークリーマンションは住居がみつからなかった際の最後の手段として心強かったが、かなりの長期入居でない限り「１ヶ月のホテルの価格帯を基準に、値引いた程度」の価格帯であった。

㉒ NPO出あいの村からは、入居に際して、浴室その他、水回り、屋根の補修など、かなりの配慮を頂いただけでなく、歓迎パーティーや観光、安全確保のための見回りその他、多大なサポートを受けた。帰国後も本学学生を含めて引き続き交流させていただいており、大分県マレーシア協会の設立構想も出てきている。大学コンソーシアムの補償制度は、結局、滞在期間とビザ（訪問ビザ）の問題がクリアできず、契約書の作成などに際して支援をいただいたのみとなったため、身元引受人として、筆者が保証人となった。

㉓ アンケートの質問項目は以下のとおりである。

Ｑ１．初めて、日本・大分県・大分県立芸術文化短期大学に来て、最初はどう思いましたか？来日してから約１ケ月経ちましたが、何か気持ちに変化したことはありますか？

How did you feel when you came to Oita College for the first time? After one month, have you felt anything different compared to the beginning?

Ｑ２．日本とマレーシアの違い、日本人とマレーシア人の違いはありますか？

What are differences between Malaysia and Japan, and Malaysians and Japanese?

Ｑ３．思い出に残ってっていることは何ですか？

What are your memories that you remember the most from Japan?

Ｑ４．友達はできましたか？日本語は上達しましたか？

Did you make Japanese friends? Did you improve your Japanese?

Ｑ５．大分県についてや芸短大については、どう思いますか？
How do you feel about Oita prefecture and Oita College?
Ｑ６．日本については、どう思いますか？
How do you feel about Japan?
Ｑ７．マレーシアに帰国したら、１番に何をしたいですか？
What did you do first after coming back to Malaysia?
Ｑ８．日本食で何か好きな物はできましたか？
What was your favourite thing about Japan?
Ｑ９．また日本・大分県・芸短大に来たいと思いますか？
Do you want to visit Japan, Oita and Oita College again?

㉔ We are on article in biggest newspaper in Oita (OITA GODO SHIMBUN INC.) 2016.11.09. Students from Universiti Malaysia Kelantan and Oita Public College are going around all over the Oita prefecture and learn from the community.
㉕

写真左上・来訪したUMK教員２名と留学生３名で一緒に学長室を訪問した。
写真右上・歓迎会の様子。平成28年10月20日木曜日16時から２時間半程度、学内カフェテリア当初予定していた60人を超える72名の参加者を得て、マレーシアからの短期留学生３名の歓迎会が実施された。学科長の歓迎の挨拶からはじまり、ダンスサークル・ボーカルユニットのパフォーマンス、マレーシアアニメの上映を通して、マレーシア学生が１名ず

つバラバラに各テーブルを回って歓談する形で、学生たちとの交流が進みました。SNSにも多くの写真や記事の投稿がみられ、学生たちにも好影響があったと考えられる。
写真左下・竹田市役所・竹田市役所企画情報課、副市長室訪問の様子。
写真右下・11月11日（金）16時50分から、本学大講義室にて、外部からの参加も交えて、マレーシアからの留学生３名の送別会・成果報告会が開催された。
https://www.facebook.com/events/920765321356226/

㉖ 以下、15点の作品タイトルを列挙しておく。「VR-test」、「3d-test2」、「【3D VR動画】べっぷ駅市場(Beppu Station Market)」、「【3D VR動画】べっぷ駅市場(Beppu Station Market)(2)」、「【3D VR動画】コタバル市百盛前（in front of Parkson, Kota Bharu city)」、「【3D VR動画】イギリス軍塹壕跡・内部（Part of inside British Pillbox at Kota Bharu）（マレーシア・コタバル市)」、「【3D VR動画】コタバル市内の壁画 The Wall Painting at Kota Bharu town」、「【3D VR動画】別府駅前（Street in front of the Beppu Station)」、「【3D VR動画】イギリス軍塹壕跡の周囲 Around the British Pillbox at Kota Bharu(マレーシア・コタバル市)」、「【3D VR動画】田の湯温泉周辺・別府市(Tanoyu spa, Beppu)」、「【3D VR動画】竹田市マルショク周辺（Street near Maru-shoku supermarket, Taketa city)」、「【3D VR動画】芸文短大・竹田キャンパス（Taketa Campus, Oita College of Art and Cultures)」、「【3D VR動画】竹田市入田・中島公園名水河川プール(Nyu-ta River Park, Taketa city)」、「【3D VR動画】Teluk Bahang Dam, Jalan Tanjung Bungah, Penang」、「【3D VR動画】芸文短大・旧ダイヤモンド広場の記録（2016年12月15日)」

㉗ 海外からの輸入品が多いが、IOSまたはアンドロイドOSのスマートフォンを装着して利用するタイプのもので、現時点の価格では使用感の良い３Ｄメガネは3000円程度で入手することができる。ダンボール製のものは1000円程度である。

㉘ 芸短フェスタ2015として取り組んだ「東南アジア交流ウィーク」に続けて、東南アジアと大分県との相互の情報発信の延長線上に、地域アーカイブズの構築を目指したものである。

㉙ 太平洋戦争時、真珠湾攻撃と同時刻に旧日本軍が上陸したPantai Sabakや戦争記念博物館だけでなく、コタバル市から少し離れると、マチャン町(Majlis Daerah Machang）クアラ・クライ町（Majlis Daerah Kuala Krai・旧イギリス軍がマレーシアから撤退した地)等の旧イギリス空軍跡、日本軍の武器庫跡などが時には生々しい痕跡を発見できる。時には、当時の兵士が使っていた装備などがそのまま見つかることもある。

参考文献

安倍尚紀、2013、「SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)の特性を活かした学生参加型の地域連携教育－－24時間動き続ける自律空間の記録管理－－」『大学教育と情報』2013年度 Vol. 2、私立大学情報教育協会、pp. 20－23

――― 2014、「マレーシア・クランタン州におけるIntercultural Learning and Community Engagement(ILCOME)プログラムの試み――短期留学でのソーシャル・ネットワーキ

ング・サービス（SNS）を活用したサービスラーニング　にもとづいて――」『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』、第51巻、pp. 71-84.
DK Publishing , 2016, *Complete Atlas of the World 3rd Edition*, DK Publishing
藤巻正己、2009、「東南アジアの国民国家とエスノナショナリズム」、『東南アジア入門』、古今書院、pp. 18-37
Heinrichs Ann, 2014, *Malaysia* (True Books), Childrens Press
稲葉みどり、2016、「アクティブラーニングを取り入れた海外短期研修の省察」、『教養と教育』16、pp13-21、愛知教育大学
吉良伸一、2011、「社会学的教育実践としてのサービスラーニングⅡ」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』49、大分県立芸術文化短期大学、pp. 87-98
Rowthorn Chris, et. al, 2015, *Lonely Planet Japan 14*, Lonely Planet

謝辞　2012年度から継続している東南アジアの大学との交流について、情報コミュニケーション学科をはじめとして事務局、国際交流委員会の先生方にサポート頂いているばかりでなく、今回は、歓迎会（参加者72名）、着物フェスティバル参加、送別会と成果報告会（一部参加を含め30名）に対して、後援会から学科振興費の給付を受けました。NPO出あいの村他、短期留学生受け入れプログラムと派生する諸業務に快く協力くださった皆様、ここに記して感謝申し上げます。また、国立公文書館本部、ペナン支部、クランタン支部を中心とするマレーシアにおける公文書管理に関する調査、観光局や地元の歴史研究グループの支援下に試みた地域アーカイブス構築をはじめ、本研究の成果の一部はJSPS科研費　16H03705（基盤研究（B）「市民社会における記録とアーカイブズの意義に関する国際比較研究」（研究代表者・藤吉圭二追手門学院大学教授）の助成によるものです。